

邑久町「長島愛生園」を訪ねて



今年も酷暑の夏を予感させるような、ギラギラとした太陽が照りつけていた六月、雲一つない真つ青な空、静かに風いだ海、私は長島に渡る橋の前にいた。眼前に広がる美しい風景とは裏腹に、息苦しさを覚えていた。その景色の向こうに見える運命の残酷さを思うと、足を踏み出せずにいたのである。

明治四十年以来、国のハンセン病対策として、強制的に隔離されていた患者の皆さんにとつて、平成八年の「らい予防法廃止」は待ちに待った知らせであった。現在、長島愛生園には五百十七名が在園している。平均年齢は七十五歳、在園年数は四十〜八十年だそうである。

お話をつた自治会長の日野さんは、一九四九年に十七歳で島に入った。連れて来られた時、列車から降りると、追い立てられるように消毒剤を撒かれたという。島では、患者の人権など無く、逃亡防止の監禁室（昭和二十八年廃止）や一坪住宅と呼ばれていた劣悪な施設での生活で、栄養失調や過労のため、多い時は一年で三百三十二名（22.5%）が亡くなつていったという。

島に着いた患者さんが最初に検査を受けていた施設は、船着場の前に建っている。今は蕨に覆われた廃屋であるが、当時としては瀟洒な洋館であったろうと思われる雰囲気を残している。だが、そこは検査を受けるだけのいわゆる診療所だったのである。島に強制的に隔離され、悲惨な療養生活を余儀なくされた入園者達の記録等様々な資料が、自治会医療委員長の宇佐美さん達の努力で集められ、これを整理保存する為の資料館も造られた。

その裏には、多くの入園者が自らの命を断つ為に飛び降りた崖がある。そのほとんど垂直に切り立つ崖に立ってみると、碧い海の沖を白い航跡を引いて船が横切っている。どうしてもこの島から出ることができない運命。なす術もない絶望に、死を選んでいった無念の思いが胸に迫り、言葉を失っていた。



入園患者を収容していた施設棟としての語り、そして穏やかな表情の奥に、凛とした気迫を感じるところ。本当の解決の日まで、国の責任は重い。



【若井たつこ】一九五二年、大阪生まれ。帝塚山学院大学卒業後、大阪府立病院救急医局秘書、代議士秘書を経て、一九九五（平成七）年、岡山市議会議員に初当選。福祉・医療・環境問題に取り組み、女性の地位向上、社会参加に全力投入。（次回より三面に掲載します）